



# IV-JAPAN

NEWS [NO. 8] 2007.2.28 発行

**IV-JAPANのタイ事業は1988年に始まり、今号はタイ特集として、タイ財団の紹介、タイに関係深い支援者や関係者をご紹介します。**

## 1. IV-JAPAN タイプロジェクト

### (1) タイ財団理事長ご挨拶

IV タイ財団は、富永代表が1980～81年にタイに在住したときにガールガイド（スカウト）タイ連盟と共働したことがきっかけで、帰国後アジア支援が始まり、タイで活動するために現地法人化が必要となったときにガールスカウトタイ連盟及びピブン福祉財団の関係者が理事に就任して現在も運営しております。タイ財団理事長のラダさんは現在ガールガイドタイ連盟の副会長兼国際書記で温厚な人柄と指導力で多くの人から慕われています。IV タイ財団の事務所も自宅マンションを提供し、お嬢さんのワライコン書記も卓越した英語力で大活躍しています。



ラダ理事長



ワライコン書記



富永副理事長

IV タイ財団は1997年に富永幸子さんによって設立され、現在バンコックで運営されております。富永さんは国際協力における様々な方面から私に大きな影響を与えてくださり、また、それをきっかけにして理事長としてこのIV財団に加わることになりました。援助活動における分野において、富永さんは私にとってモデルであり、また沢山の人が富永さんの熱心な活動から得られるものがあると思います。富永さんが不屈の精神で恵まれない子どもたちのために奨学金を寄与したり、女性の自立を支援するための職業訓練を実施しています。現在、以下の5人が財団理事として活動しています。富永幸子（副理事長）、アンパイ・ニランソー（会計）、ピティカン・シティヒデイ（理事）、ワライコン・プロムヨティ（書記）。又スリン県にはプロジェクト調整員のウイット・コンサップ先生がいます。全員ボランティアで働いています。

97年に富永さんがタイ国王より、勲4等ディレークンアボン賞を受賞したことは私どもの誇りです。富永さんの強い決意とボランティア精神が私たち理事のモチベーションを向上させ、そして私たち理事は結束してこれからも事業に励んで参りたいと思います。  
ラダ・プロムヨティ IV タイ財団理事長

### (2) ガールガイドタイ連盟創立50周年記念式典に参加

2006年12月12日にチョンブリのボーイスカウトキャンプ場で標記の50周年式典が開催されタイ全土及び各国からガールスカウト関係者2000人が出席しました。私は皆様の奨学金を長年タイガールガイド連盟を通して農村の子供たちに支給している関係で、ご招待を受けました。お世話をするボランティアの中に北部チェンライ県から来た奨学金一期生(1990年)たちの姿を見つけ、再会を喜び合いました。その中の一人の女性は努力して通信教育で大学もでて(村で始めての大

学生)、もう30歳近いと思いますが、村会議員に選出され活躍しています。スリン県で奨学金を支給したやはり一期生の男子は連盟職員として大活躍していました。キャンプ場便りは、チュラロンコン大学の数名の学生ボランティアが昼間取材した記事を夜中までパソコンを打ち、翌朝バンコックへ持参し印刷して、キャンプ場で配布するという連絡プレーで、上手にボランティアを組織していました。私が大変お世話になりました。創始者の一人のカノック女史はバンコクの連盟本部に住んで

手厚く看護されていますが、認知症が進み一言も発しません。私がお見舞いに何うと、英語で少し話すことができ、私を確認できるようです。時には目ではっきりと答えます。連盟はチェンマイ支部の中に寄附金でカノック邸を建設し生涯住めるようにしましたが、バンコクのほうがお好きのようです。お世話する家族もなくなりましたが、連盟がしっかり面倒を見ているのは、やはりタイ人の優しさからでしょうか。

(富永記)

### (3) 国際協力 NGO・IV-JAPAN との出会い

佐藤美津子さんは長年カノック奨学金の里親として、毎年 12 名のタイ学生に奨学金を送ってくださっています。事務所ではいったいどんな方なのか、どんなお気持ちで沢山のタイ人学生に支援して下さっているのか興味深く思っており、今号に執筆をお願いいたしました。



佐藤美津子さん

私と国際協力 NGO・IV-JAPAN との出会いは、今から 15 年前の 1992 年、この団体の前身である国際ボランティアの会のことが朝日新聞に記事として掲載されたことに始まる。記事の内容は、御主人の仕事でタイに滞在していた一主婦富永さんが始めた、タイの子供達への教育支援「カノック奨学金制度」について書かれていたものだった。私がなぜこの記事に興味をもったかという、私も仕事の関係で東南アジアの方々と一緒に働く機会が 1981 年頃からあり、中でもタイ国の女性と仕事を通じて親しくなった。数度のタイ訪問で親近感を抱いていたことと、ちょうど 1992 年にタイのプロジェクトに関わっていたこともあり、タイの動向にいつも注意を払っていたからだと思う。当時、私は韓国とフィリピンの子供支援プログラムに参加していて、タイにも適当なプログラムはないものかと探していたのだ。子供の就学率を上げるための奨学金制度「カノック奨学金」にとっても感動し賛同したのを覚えている。

私は 1975 年位から 20 年余り東南アジアとアメリカでビジネスをしてきた。70 年代の東南アジアはまだ発展途上にあつて活気に満ちあふれてはいたが、未就学の子供達が大勢いたのだ。様々な支援の中で、なぜ子供達の支援に興味があるかと言うと、すぐ目の前の急を要する食料支援や医療支援も大切だと思うが、同時並行的に時間はかかるけれど将来を担う子供達の教育支援が大切だと常に考えているからだ。そういう意味で富永さんの活動に協力をしたいと思ったのである。

### (4) タイの発展と変らぬタイ人の優しさ

昨年の 5 月、3 年ぶりにタイの北部のミャンマーと国境沿いの町メーサイに行って来ました。3 年ぶりで見ると、ネットカフェ、道路沿いには大きなスーパーマーケットや何と皆様をご存知の「セブンイレブン」が 3 店舗もできており、以前は何も無かった山の頂上近くにも「セブンイレブン」があったので非常に驚きました。この様な状況なので一見するとタイは裕福な国の様に思えますが、今年は原油高により地方の農民は米を収穫しても、米を買ってもらえない為に現金化できず、借金がかさんでいるそうです。このことから、都市と農村の経済格差の拡がりを感じました。経済的に恵まれており、海に面しているタイでさえ、この様な状況ですから海の無い国ラオスの状況はどの様かは？想像に難くないと思います。暗い話だけではいけませんので、最後にほっとした話

(注：後藤氏がタイ駐在の 3 年の間に射止めた奥様はタイのメーサイ出身です。)



学生たちと

国際ボランティアの会で私がユニークで面白いと思った活動は、タイ東北部スリン県での「なまず養殖プロジェクト」である。学校内になまず養殖のための池を作り、半分を生徒の給食に半分は市場で売るといったものだった。なまずの成長は早いので半年で成魚になると書いてあったと思う。早速、このプロジェクトに参加したら、後々、水槽とナマズ料理の写真が数枚送られてきて、結構笑えたのを覚えているし、今でも楽しい思い出として残っている。また、1 年に 1 度送られて来る子供達の手紙に励まされるし、いつか手紙の紙質をもっと良い物にしてあげたいと毎回思う。

時の経過と共に私の環境は変わった。それでも 15 年間変わらずに IV-JAPAN の支援者の 1 人としていられるのは、この団体が地道に活動し止まることなく成長しているからだ。活動を始めるのはそう難しくはないが、長期に渡って継続していくことは、相当の困難があると思う。情熱とパワーとが一体となって活動は続けられるのだろう。

私は転職し大学教員になって 10 年になるのだが、若い学生達に発展途上国の実情や日本からの支援プロジェクトについてもゼミでなるべく伝え、皆で考え討論している。若い学生達が自分の国ばかりでなく、他国の人々のことにもっと関心を持ってもらえたらと願っているのである。

佐藤美津子

で終わりたいと思います。メーサイの市場へ買い物に行ったときに、3 歳と 5 歳位の女の子が 2 人、1 人は裸足で大人のサンダルを胸に抱えたまま、もう 1 人はお姉さんの服を掴んだまま、迷子になったのかワンワンと泣いているのを見かけました。子供 2 人が泣くを見て、近くのお店の人が「どこから来たの？」、「お母さんは？」と聞いていますが、言葉が通じないのか泣きじゃくるばかりでしたが、周りの人達で一生懸命に世話をしていました。地方は経済的には恵まれていないかも知れませんが、この様な光景に出会って心が和むことがあります。

難しいとは思いますが、経済力が向上しても、この優しさはこのままでいて欲しいと願っています。

後藤 隆 (IV-JAPAN 日本事務局長)



## (5) カノック奨学金の里親から、今はIVの会の会計ボランティア

10年以上前のある日のごく小さい新聞記事『年12000円で子どもが学校に行ける。』タイのことなど全く知らないし、興味もなかったが「月1000円なら」。ただそれだけで始めたカノック奨学金。サパチャンはその中で巡り会った一人です。地方の農村からバンコクへ出た彼女に つたない手紙とこずかいを送ったのも今は昔。昨今はメールでやりとり。「いつタイへ来るの？」深夜電話が鳴り、始めて声を聞いた時にはびっくり。今だに“???”は多いですが、お金の苦労はなくなった様で、昨秋は食事をごちそうしてくれました。彼氏とともに空港で見送ってくれた彼女に、もう貧しさの陰は有りません。

2年前、富永代表から「スタディツアーに行きませんか？サパチャンと会えますよ」とお誘いを頂き、4割の不安を6割の好奇心が押さえていざラオス、タイへ。これは私にも10日間父子家庭となった夫と息子にも、以降いろいろな意味で自信になった旅でした。さて会うとなれば挨拶ぐらいタイ語でと意気込んだものの早々撤退。ラオスってどこ？と思いつつ、地図も見ずに出発。何ともいい加減な私でしたが…ムツとした熱気、ほこりっぽい町並みに「ああ、この町の誰かに私はお金を送っているんだ」「IVはこの町の事をやっているんだ」と感慨深くなりました。ラオスの田舎町は『子どもの頃の田舎みたい』な風景。その中で瞳

輝く子ども達は正に『ぼろは着ても心は錦』。当たり前に関わり、家族助け合い、自ら学び、工夫して遊ぶ。方やお手伝いを頼めば「いくらくれる？」と言い、周りを気にし、いやでも勉強させられる日本の子供も。礼儀正しく、気高さを感じるラオスの子どもの姿に、「どっちが幸せなのか」と複雑な思いでした。この子供の中には様々な才能があるだろう。が、多くは自らの能力に気づかず、生かすチャンスもなく終わってしまう。サパチャンは奨学金を得、私との出会いを生かし、『今』につなげることができたが、この子供はそんな機会を知ることも得るすべもない。と私にはどうすることもできない。「ならばせめて今自分にできることを」と思ったその時、「ね、IVの会計やって！」ってそんなあ…以来NGOのこと、タイやラオスのことなどいろいろ勉強させられています。人生いろいろな出会いがあるものです。

片山純子 (IV-JAPAN 事務局会計)

注：片山さんは税理士事務所に長年勤務するベテランの経理ウーマンです。一手にIVの会計をボランティアで処理し、税務のこと会計のことは瞬時に回答してくれる頼もしい専門家です。



## 2. ノンドン村小学校建設終了

大阪のジャパン・ヨガ・カレッジ(株式会社JYC)の寄贈によりノンドン村に小学校建設が終了しました。9月1日の新学期に大阪から株式会社JYCの方が5名出席しハンドオーバーを行いました。



J-YOGA-SHIHO ノンドン小学校



柳生ニャンカオ小学校

## 3. 柳生ニャンカオ小学校建設

山梨ラオス友好協会の柳生様の寄贈により、ヴィエンチャン都から車で6時間のカムムアン県タケク郡ニャンカオ村に小学校を建設しました。この小学校の建設も「建設職業訓練」として、村民が建設に従事しました。建設に従事した15名の村民は学校の完成後、日本の左官の技術が身につく、自分の家や職業として住宅建設もできるようになります。2月1日のハンドオーバー式典には山梨から志治会長も出席し、学校の中に設けられた図書室には約400冊の図書も山梨ラオス友好協会により寄贈されました。先生方は既に図書館運営ワークショップにも参加しており、すぐに図書の貸し出しができます。

## 4. スポーツ教育振興事業(コート建設) 一彩の国さいたま国際協力基金—



新設されたサラカム中等高等学校のスポーツコート

青少年のためのスポーツ教育振興としてヴィエンチャン都内の中・高等学校1校にバレーボール用コート进行建設し、スポーツ教育に関するワークショップを実施しました。当初はバドミントン兼セパタクロー用のコート建设を予定しておりましたが、校庭が整備されておらず凹凸であること、また、バレーボールが行えるようにとの配慮からバレーボール用コート建设となりました。ワークショップ参加対象の体育教員も計画の5校から10校に増やし、多くの教員がスポーツ教育を行えるように取り組みました。ワークショップではラオスで人気のあるスポーツ(サッカー、セパタクロー、バレーボール、バドミントン)の正式なルール、基本的な準備体操について等を学びました。

## 5. ヴィエンチャン職業訓練

10月2日より11月24日まで理美容・縫製・調理の3分野の基礎コースを59名を対象に職業訓練を実施しました。特に調理コースはブルネイ大使夫人からチョコレートの作り方を教えていただきました。材料は全て夫人が持参してくださいました。夫人はブルネイでケーキやチョコレートのお店を運営していたので材料もよく吟味し、ラオスで入手可能なものを使用していました。外交官夫人でありながら指輪やアクセサリもつけず、指の爪も短く、マニキュアもなく、プロとして手際よく指導していただきましたのはさすがです。美容は日本から来ラオ中の堀井雅由美容師がボランティアで2日間講義と実習を実施する機会があり、日本の最新技術とヘアデザインを学ぶ機会が得られました。この機会に学んだことが、今後の訓練で活かされることを期待します。(株)資生堂より美容コースに助成金20万円いただきました。



美容コース

## 6. さいたま市水道局ポンサイ小学校へ井戸寄贈



井戸 ポンプ

さいたま市水道局では、平成4年(1992年)からJICA(国際協力機構)長期・短期専門家やJICA・JICWELS(国際厚生事業団)調査団への参加、カウンターパート研修員受入など13年間にわたりラオス水道事業体の人材育成に貢献してきました。そして、これまでの経験を活かしながら、平成18年度から平成20年度までの3年間、ラオス国内の主要都市の水道局を対象として、JICAの「草の根技術協力(地域提案型)事業」により配給水管の維持管理技術向上を目的とした新たな技術協力をはじめています。

私個人としては、平成11年から平成12年にかけて10ヶ月、その後、平成14年から平成17年まで約3年間、水道計画のJICA専門家としてラオスに赴任し、家族(ラオス好きの妻と大のラオス好きの息子)と一緒に豊かな自然、そして何よりも優しいラオス人に囲まれて楽しい日々を過ごしました。

帰国後、次期専門家を育成する目的でさいたま市水道局英語クラブを立ち上げ、クラブ活動の一環としてこれまでのラオスへの関わりを紹介するため、国際友好フェア(さいたま市内で開催)に参加しました。その時メンバーの提案で水道局職員からの寄付を受けた品々をバザーで販売し、仲間と楽しいひと時を過ごしながら収益金を得ることができました。この収益金の使い道をIV-Japanの富永さんに相談したところ、水道局に関係の深い井戸寄贈の話を受け、笑顔がかわいいラオスの小学生に飲料水をプレゼントすることができました。お忙しい中、調整/協議に奔走して頂いたIV-Japanの方々水道局の愉快的な仲間に感謝します。

さいたま市水道局 川島康弘

## 7. 第9回日本文化紹介(10/28~11/6実施) —東芝国際交流財団助成事業—

今回は日本の生活習慣を伝えようと、着物ファッションショーに「日本の四季」を構成して、折々の日本の風習や儀式(餅つき、羽根突き、盆踊り、三三九度の結婚式、七五三参り等)を紹介して実施しました。

また、今回の日本文化紹介については現地のフランス語新聞等に掲載されました



Défilé de kimonos dimanche à l'hôtel Lao Plaza pour marquer la 9e édition de "Connaitre le Japon", organisée par Mme Sachiko Tomimaga (Tere à gauche), représentante de l'ONG International Volunteers Japan. Le clou de l'événement, sponsorisé par la Fondation internationale Toshiba et le Centre Lao-Japonais de l'Université nationale du Laos, est la magnifique tenue de la mariée (au centre). Une performance du groupe Overdance a clos la soirée. Photo IV-Japan

LE RÉNOVATEUR | 01 novembre 2006 | 27



## 8. ワークキャンプ (8/4~8/7 実施)

今年のワークキャンプはシェンクアーン県ナーパイ村で実施され、早大の「平山郁夫ボランティアセンター」主催ラオスフィールドトリップに早大生 21 名が参加致しました。授業の単位として認められるため、IV のシェンクアーン農村開発事業が取り上げられました。参加した学生はホームステイを体験し、また当会が実施している米銀行や家畜銀行などの農村開発プロジェクトを見学しました。村のコミュニティーとしての連帯感や村民の暮らしを目の当りに

して、学生は「貧しい」という定義を改めて考えていました。この体験を通じて感じ、また考える学生達を見て、このワークキャンプの意義の大きさ改めて認識させられました。参加した学生の中から 2 年生の高見澤直子の感想文を紹介させて頂きたいと思います。高見澤さんは、このワークキャンプに参加したことをきっかけに、将来開発援助に関わる仕事に就きたいと考えています。

### 「ラオス体験☆」

昨年の夏、私は大学の授業の一環としてラオスを訪れた。「東南アジアの開発と NGO の役割」という表題を掲げたこの講座で、フィールドワーク (実地調査) という大義名分のもと、約 2 週間 “ラオスを体験” することができた。内容としては、観光開発などの政府中心の国家事業と民間を中心とした地域開発事業を調査しようというものであった。しかし調査とはいっても、学部生である私たちにできることは限られていて、開発を間近で見学し、直接的に開発に携わる人々にお話を伺い、間接的に開発事業を経験する人々にお話を伺う、というかなり安直なものであった。今回、民間を中心とした地域開発事業の担い手として、日本の NGO・IV-JAPAN の活動を見せて頂く運びとなっていた。

「夏休み、ラオスに行くことになったの！」私が母親にそう告げると、「随分遠くまで行くのね、いいわねえ。」という返事が返ってきた。心配性な母親からの意外な言葉に“今までは親としての義務を果たしてただけだったのか…お疲れさま。”などと、勝手な感慨にふける私を尻目に、「函館には泊まらないの？」という変化球を放ってきた。羅臼じゃないよ…一瞬にして状況を把握した私は、今後の身の振り方について考え始めた。その日から約二週間かけてじわりじわりと説得した結果、受けられるだけの予防接種と持てるだけの常備薬を携えて行くこと、そして全行程の詳細と緊急連絡先を伝えていくこと、帰国後

の親孝行などを条件にラオス渡航を許された。彼女は少し危惧しすぎであるが、東南アジアに位置し人民民主共和国を称するラオスに対するイメージは、多くの人にとって鮮明とは言えない。私の中のイメージでさえ、授業で教わった簡単な歴史と数枚の写真、GDP などの数値、そして残りの大半が「地球の歩き方 ('02 版)」によって構成された薄弱なものであったからである。

ラオスに降り立ち、かなりの交通量と観光客向けの店が立ち並ぶ首都ビエンチャンで主要な省庁を訪問した後、シェンクアーン県へ向かった。ここで IV-JAPAN の方々にその開発事業を見せて頂いた。牛銀行と米銀行、何やらおいしそうな銀行だね…などと友達と話していたが、詳しい説明を聞くとそれが間違いであっただけではなく、かなりスケールの大きいプロジェクトであるということがわかった。私たちが銀行という言葉を知るとき、ある種のイメージが想起される。しかし、それは資本主義社会を理解した人が持つ固有の概念と言える。その根本概念を持たない、もしくは身近なものとしにくい人々に対してその原理を伝え、概念をつくり上げ、その将来的な利益を説き、開発事業として成立させる…すごい！実際はこれほど仰々しい行いではないのかも知れないが、私はそのスケールの大きさに圧倒されてしまった。貸していた家畜が死んでしまった場合についての対処について尋ねると、スタッフの方が「仕方がないですね。」と回答した。私はこの言葉に再び感

動してしまった。純粋に村民の利益を目的としている人の言葉だと思ったと同時に、ボランティア・自主性という言葉が少し軽すぎる様に感じられた。その後、二泊三日のホームステイをさせて頂いた。私が泊めて頂いたお宅では、英語が話せる人がいると伺っていたが、「How old are you?」と聞くと「No…」という返事が返ってきた…。やばい、と思った。しかし、けがの功名で、ラオス語と日本語での会話はかなり温かいものとなった。家族みんなが必死でこちらの意思を読み取ろうとしてくれたからである。英語を流暢に話す人を中心に据えた会話より、はるかに親密な雰囲気。夜にはろうそくの明かりで近所の子供たちと一緒にラオス語と日本語、英語の勉強をした。彼らの顔は好奇心に溢れていて、とてもすてきな笑顔を見せてくれた。どれほどの文法単語を駆使して意思を伝えるよりも、笑いかけて同じ気持ち共有できることのほうがはるかに楽しく、嬉しい。そんなことを教えてもらった。二週間のフィールドトリップのうち、シェンクアーン県にいた日数はわずか四日ほどであったが、私の中では一番印象に残っている。最もラオスを身近に感じ、ラオスの人々の持つ優しく穏やかな雰囲気に触れることができた日々だった。

私は、このことがきっかけで国際協力に興味を持つようになりました。貴重な体験をさせて頂いて本当にありがとうございました。

早稲田大学 2 年 高見澤直子

## 9. 第9回ラオススタディツアー

今回のスタディツアーは2006年10月28日～11月6日まで、リピーターも多く8名が参加して実施されました。ツアーに参加して様々な経験をし、多くの思い出と改めてI Vへの支援の思いを強くされたとのこと。3度目の参加となる佐復正雄さんからの感想です。佐復さんも含めた3名は特に希望してラオス南部も訪問しました。



コーンパペンの滝



年1度のタットルアン大祭に参加

成田発バンコク行きのシンガポール便が4時間遅れと伝えられたため、ヴィエンチャンまでの乗り継ぎが不可能となりそうでした。翌日行うファッションショーの出演、資材や美容着付けを参加者が主に行う役割分担になっていましたのでなおさらでした。日本・ラオス事務局や旅行社に再三連絡するも搭乗機が飛ばないことには・・・ヤキモキの連続でしたが何とか3時間遅延で離陸しました。

2日目はラオ・プラザ・ホテルで予定どおり行われた「日本文化紹介(着物ファッションショー)」は約300人の賓客を迎え、在留邦人やI Vにゆかりのラオス青少年たちとツアー参加者も手分けして熱意あるステージを演出しました。ラオスにおいて日本理解に大変役立つと思いましたがこのショーに参加した仲間全員で新しい絆が出来たことを深く感じました。

その後文化遺産の街「ルアン・パバン」を訪問しました。2度目の訪問でしたが首都ヴィエンチャン同様、道路や街並も整備が進んで清潔さが表れている様に見受けられました。メコン川を2時間ほどボートで遡りパークウー洞窟までクルージングも楽しめました。途中酒づくりの村へ寄り寄りましたが酒より絹製品を多くの方が買い求めていたようでした。名物のナイト・マーケットや早朝の托鉢行列風景もホテル前で見られ参加したことも他ではできない貴重な経験でした。

今回は特に希望して南部の主要都市「パクセ」とメコン川が荒々しく一気に流れ落ちる「コーン・パペン」の滝に行きました。5時30分ホテル発10分ほどでワットタイ空港へ着きここでガイドのKさんと落ち合う手はず・・・でしたがナカナカ姿見せず！！私達は仕方なくチェツクイン済ませ搭乗待合室へ。あと3分というところ、危機一髪でKさん登場しましたが言葉ができればガイドなんか要らないというところでした。このアクシデント、手配ミスはパクセ空港での出迎えの車なしということことが現実に続きしばし呆然となりました。文化の違いと言う人もいますがこのようなことは、あってはならないことで旅行社の責任は免れないと思いました。これからの観光立国をラオスが目指すのであればハード面のみならず、ソフト・つまりガイドや旅行社の質的向上が望まれますところ。です。

南部の主要都市パクセから約2時間であこがれの「コーン・パペン」の滝に到着。ドドドという連続音と濁った濁流が目前に迫る風景はメコン川最大のポイントと言っても過言ではありません。また、途中にある「ワット・プー」遺跡も見逃せません。アンコール・ワットと同世代に作られた遺跡でパクセから30分でメコン川の渡し舟に乗り30～40分で着きます。できればメコン川近くのゲストハウスに泊まりたいものだと思います。パクセ市ではトゥクトゥクと呼ばれる三輪オートバイで市内を回ったことも、良い思い出の一つとなりました。日本のODAで作った日本・ラオス友好橋も渡ってみましたし、ラオスの人々の活力を感じる市場にも行きました。「百聞は一見に如かず」の言葉とおり、自分の

目で見るのが大切だと思いました。

今回で3回目のスタディツアーでしたがたくさんの方々の力を借りて楽しい体験が出来たこと感謝申し上げたいと思います。そのような意味合いからも、IV-JAPANの施策発展を願うと共に微力ながら支援したいと考えています。

なお、今年のスタディツアーの予定は11月。シームアン寺のローソク祭りが22日、タットルアン大祭が24日に予定されているので16日(金)～25日(日)頃になると思います。日本文化紹介のファッションショーも計画しています。出演者としても良し、美容、着付けのお手伝いいただける方は是非ご参加いただきたいと思います。古都ルアン・パパンやジャール平原の遺跡にも同行したいと思っています。

佐復正雄 (IV-JAPAN 理事)



体重を計る斎藤加代さん

斎藤加代さんは2004年に斎藤タソモ小学校を寄贈したドナーで、またスタディツアーの毎年のリピーターですが、2005年から同小学校の全生徒を対象に身体測定を行っています。ラオスでは身体測定は実施していません。元保健婦の斎藤さんができるボランティアとして、子供たちの成長記録を5年間実施して、小学校卒業の記念にしたいとのことで始めました。標準体重等の記録のないラオスでは貴重な資料となるでしょう。

### 「日本語が得意なルアンパパンの若い僧侶」

吉野さんは富永代表と20代から青少年活動をご一緒にして、青少年育成国民会議事務局長を退職後、当会の副代表理事として外務省、JICA等の担当として活躍しています。毎年ラオスに長期滞在されています。

ルアンパパンの朝は托鉢の僧侶を待つ女性達の姿で始まる。ひざまずいて僧侶を待つ人々の顔は一樣に見えるが、一人ひとりの思いや願いはきっと様々なのだろう。

早朝、私たちはサッカリン通りに座り僧侶達が近づいて来るのを待った。山吹色の衣をまとった僧侶が鉢をかざすと、私は静かに一礼して鉢の中にお菓子を入れた。不思議とすがすがしく、心が洗われたような気持ちになってくる。

私たちの前を100名近い僧侶が托鉢をしながら通って行く。長老からまだ12～13才位の幼い僧まで、真剣な面持ちで取り組んでいる。毎朝の喜捨は、僧侶の1日2回の食事になるという。喜捨する者も托鉢する僧侶も大切な一日の始まりなのだ。そんなまじめな早朝の顔と同時に、昼間、寺の庭からこちらに向かって「どこから来たのですか？」と日本語で話しかけてくる若い僧侶もいる。坊主頭に、にこやかな顔をして私たちを見ている。英語で話す僧侶は多いが、日本語をこんなに巧みに話すなんてと驚いていると、次々と日本語で質問をして来た。「ああ、これがラオスのガイドブックにあった青空外国語教室なんだ」と納得する。私は彼を18歳位だと思ったが、実は15歳。賢そうな僧侶だった。持っていたノートにはラオ語と日本語が書いてあり「これは日本人の誰々さんに教えてもらったのです」と言ってノートを見せてくれた。「そう、これはみんな覚えたの？」と聞くと、「覚えました。これも覚えたよ」と言ってひらがなを指さした。他の僧侶も周りを囲み、15歳の少年僧侶は一人舞台だった。

青空教室でこんなに語学の力が花開くなんて、それにしても日本語を一所懸命学ぶこの15歳の少年は、きっとラオスと日本の架け橋の一員になるにちがいない。勝手な思いに胸を膨らして、ルアンパパンをまた訪れようと思った。

吉野貴美子 (IV-JAPAN 副代表理事)



ルアンパパンの托鉢風景



## 10. 千客万来

色々なお客様が当会のラオス事務所・ヴィエンチャン都職業訓練所を訪問されました。

### 2006年9月

- ・ 上田義朗流通科学大学教授と「クリーンアップ」プロジェクトの学生7名が来訪、IVの職業訓練を見学後昼食をOJTレストランで。
- ・ 豊田利久広島修道大学教授が来訪。

### 10月

- ・ 茨城大学よりスタディツアーで6名来訪、IVの職業訓練を見学後、実際にシャンプー等を体験し、昼食にカツ丼を食して大満足でした。
- ・ ガールガイド・タイ連盟トレーナー8名がセンターを来訪、日本食に感激していました。食後は富永宅でキムの演奏やランボン（ラオスの盆踊り）を楽しみ、久しぶりに富永もガールスカウト戻って、再会を楽しみました。

### 11月

- ・ 日本から堀井雅由美美容師が来訪し、職業訓練美容コースのボランティア講師として講義と実習をしていただきました。練習に必要なマネキン人形やパーマのロット等ご寄付いただきました。
- ・ ブルネイ大使夫人が来訪し、調理コースでチョコレートの作り方を教えていただきました。

### 2007年1月

- ・ JICA 兵庫 大井明子様総勢45名が昼食とIVの活動見学。
- ・ いわき市のザ・ピープル吉田恵美子理事長と高橋豊子さん、一緒に共働できないかと。
- ・ 外務省国際協力局長別所浩郎氏と飯田展子氏が、2000年に外務省補助金で建設されたセンターと家具工房も見学。（右写真）
- ・ 岡山県三宅恒弘氏、カンボジアで個人ボランティアをしているが、ラオスでの支援可能性を調査に。
- ・ さいたま市水道局の川島康弘氏と石川智一氏が来訪、昼食も試食。
- ・ フランスのNGO「AFESIP」が美容職業訓練開始のために見学。
- ・ 元ニカラグアJOCVの馬場亜衣子氏が来訪。



### 2月

- ・ NPO法人IMCの大久保氏をはじめ総勢10名が来訪。バスケットボールと中古衣料をいただきました。

## 11. 東京ウイライオンズクラブ木工家具コース支援、ラオス国際女性グループ(WIG)木工機械寄贈



支援を受け購入した家具工具

2006年8月上旬深夜、当会の木工家具センターに窃盗が入り、約12万円相当の木工工具が盗まれ、木工家具の職業訓練を実施することが困難な状況に陥っていました。そのために、当会はラオスのWIG (Women's International Group) に家具コースを実施するため、木工工具購入の資金の申請をし、2007年1月に支援を受け購入しました。これを機に、今後このようなことが起こらない様に現在万全のセキュリティー体制を整えています。

したがって木工家具コースの開催が延び延びになり、さらに家具工房が現在地から郊外に移転するため、東京ウイライオンズ支援の家具訓練基礎コースは07年4月～6月の2ヶ月間に行うことになりました。現在の家具工房はヴィエンチャン都教育局、ホテルやオフィスがある中心地にあり、機械の騒音等の関係で移転します。

## 12. グローバルフェスタ参加(9/30、10/1実施)

今年も「外務省・独立行政法人国際協力機構(JICA)」により開催されました「グローバルフェスタ2006」(開催場所:日比谷公園)に参加いたしました。初日は天気が快晴で来場する方も多かったのですが、残念なことに2日目は天気予報では夕方遅くからのはずが、午後から雨に降られました。2日目は雨に降られましたが、以前からご協力いただいた方がお見えになる等の嬉しい出会いもありました。2007年も参加の予定ですので、ご来場下さい。また、ご来場いただいた皆様、有難うございました。



IV-JAPAN ブース

## 13. テレカ収集が広報誌に掲載される

さいたま市社会福祉協議会の広報誌「ポケット」(2006.10秋号)に当会が掲載されました。広報誌掲載により、多くの方より寄付の問い合わせがあり1人で3000枚もご寄付いただいた方もおりました。この様に広報誌に掲載されますと収集物が多く集まり運営費の一部となりますので、当会の活動が掲載できる誌をご存じでしたら、事務局までご連絡下さい。



### 2年ぶりのチェンマイ訪問

今年のお正月休暇はタイ北部のチェンマイの友人ノイさん宅にお世話になりました。ヴィエンチャンからは飛行機が飛んでいて、ルアンパバン経由ですが約2時間で着きます。2年近くチェンマイには行っていませんでしたので、その変容振りには驚かされました。道路が整備され、「世界花博」が開催中でそのお隣は「ナイトサファリ・パーク」ができていました。前首相のタクシン氏の出身地のチェンマイは優遇されその経済効果も大きいようです。日本もラオスも花博に参加していて、懐かしく見学しました。ラオスはカリン材でラオス風パビリオンが建設されていましたが、床

は木材乾燥が不十分で既に床板がそり上がっていました。日ごろ木工家具コースで取り入れたいと思っている乾燥技術ですが、残念ながら政府建設のパビリオンですらこの有様です。ナイトサファリ・パークは良くこんな構想を考えるものだと思いますが、シンガポールにもありそれを参考にしたようです。両会場とも電気自動車で回れるようになっていてとても便利でした。愛知県の「愛・地球博」を見る機会もありませんでしたが、きっともっと最先端の技術が使われたことと思います。

### ラオス伝統工芸展に参加

チェンマイから戻って翌日にはルアンパバンに飛び、ルアンパバン県副知事が主賓の「ラオス伝統工芸展」に招待されました。プーバオホテルを会場に開催され、長らくフランスに亡命して昨年帰還した元王族のチャオ・ソムサニットが継承保存していた王族の衣装の公開や、伝統工芸の漆金細工、花細工、織物、刺繍、音楽等を実演して見せてくれ

ました。当時の衣装やハンドバッグ、装飾品を身につけてファッションショーも行われました女性王族の衣装は刺繍が施され、その刺繍は明治時代の軍人の礼服等に使用したような金糸(中がビーズのように空洞になっていて、金糸を細かくビーズのように切ってから糸を通して刺繍する)で刺繍されていました。ラオスでは結婚式の花嫁の衣装は

ルアンパバン風が好まれ金糸で刺繍したものを良く見ますが、今回は別もののようなもっと手の込んだ素晴らしいものでした。布地も女性の絹地は中国製、男性のはインド製の絹でした。日本でも一昔前は舶来品が好まれたようにラオスでも王族は高価な舶来品を使用したのでしょうか、空想が膨らみます。



ルアンパバン金糸刺繍の様子



ルアンパバン県副知事と



掲載ページ

### ※サヨ月刊誌の紹介記事

ラオスで初めての月刊誌「サヨ」が発刊されたのは2年ほどまえ。全ページがカラーでファッションと旅行案内を中心にラオ語と英語で書かれています。月刊誌と言っても資金の都合からか、毎月発行されませんし、遅配が当たり前です。印刷はバンコクでされているのでとてもきれいです。サヨの昨年9月号に2ページで私の紹介記事が掲載されました。「ファッション・アイコン」というコラムでいろいろの質問に答える形式です。日本人では初めての登場で、前号はマレーシア大使でしたので、私もかなり迷いましたが、I Vの宣伝になれば良いかな〜とお受けしました。(写真参照) そうしましたら、スーパーへ買い物に行っても、ルアンパバンに行ってもあなたを知っているといわれ、「サヨ」がラオス人によく読まれているのにはビックリしました。出版物の少ないラオスでは約300円で買える貴重な情報誌なのかもしれません。というわけで有名人になってしまったわけですが、1月にラオス在住10周年をラオス人が祝ってくれました。日本人でも古株になりました。

## カノック奨学金ドナー紹介 (2006/7/16 から 2007/2/28 まで) 順不順

岡庭史子(2口)、小川昭子、佐藤美津子(8口)、町田裕、伊藤睦子(3口)、伊藤裕子(3口)、吉原喜代、河島一郎、石黒 進(2口)、佐々木孝子、座安きくえ、斎藤加代(3口)、森 典子、西条喜子、石川隆二、入澤恵子(2口)、市川和良(2口)、八木道子、園田敏子、小林愛子、佐藤文子、野口正晴、早坂健治(2口)、高原幸子、宮下ひとみ(2口)、熊野恵一、福永文代(2口)、城間照子、中村江里子(3口)、金指五郎、松本薫、平良和子、森聰、外間邦子、古柴睦美、田中えいこ(3口)、松茂良米子(2口)、國吉裕子、國吉利弘、蛭間愛子 G S千葉45団、宮村 肇(10口)、津本容子、比嘉エリ子、白川誠之、塩川悠子(2口)、土屋祥二、込山まち子、土屋多賀子、石井有美、高石順子、金戸美知子、田中恵子、根橋淑江、村上淳子(2口)、賀元澄子、橋本多映子、武居近子、大谷彩、片桐鈴子、土屋紀子、謝花恵子(2口)、伊東慶子、金子澄子、古謝哲哉、小林佳代子、渡辺伊久子、和田治江、菊原享子、武藤廣子、G S大阪73団、濱口敏行(3口)、近藤利雄(2口)、みどり幼稚園みどり会(2口3年間)、小田切智子、足立毅平、中村英一、奈良伊世、田中美樹子、大野宏江、大野歩・望、石井直子、嶋美樹子、田村福代、嘉数和子、野口正晴、泉久子、望月優子、鈴木ミチ(3口)、三沢純子(2口) (2007年度前受け金を含む)

### 運営・プロジェクト費寄付者一覧

(2006/7/16 から 2007/2/28 まで一万円以下は省略させて頂きます。ご了承下さい。)

安達典生(3万5,605円)、疋田雪子(1万円)、豊田利久(1万円)、宇野 薫(1万円)、栗林 聡(10万円)、東京ウィルライオンズ(10万円)、山梨ラオス友好協会・柳生晨策(\$40,350)、後藤生光(\$5,005)、彩の国さいたま国際協力基金(25万円)、稲葉純子(1万円)、WIG(\$1,150)、株式会社 資生堂(20万円)、**皆様のご協力に感謝いたします。有難うございます、今後も引き続きご協力をお願い致します**

### 事務局より

#### 1) 奨学金の銀行振込化

皆様よりご要望のありました銀行振込ですが、振込を忘れないようにするためには自動振込が最適です。自動振込には銀行での手続きが1回だけ必要ですが、後は手続き不要となりますので、ご検討をお願いいたします。

#### 2) 認定NPO法人申請延期

前回のIV-NEWSで、ご説明させていただきました「認定NPO法人申請」ですが、認定を取得した海外協力活動を行っている他のNPO団体から情報を収集しました結果、海外協力活動を行っている場合は認定を取得・維持する為の資料等(要日本語訳)が必要となり、会計に関してより多くの労力が要求されることが分かりました。新たに職員を増員する余裕もなく、本来の活動に重きをおきたいとのことから、「認定NPO法人申請」を延期しましたことをご報告いたします。今後認定NPO法改正が進み、事務が簡素化され、さらにメリットが多くなりましたら申請したいと考えております。寄付者の皆様には申し訳ございませんが、ご理解いただけますようお願いいたします。

#### 3) 電子メールによる情報発信について

迅速に情報を送付できることから、電子メールでの連絡を考えております。

皆様のメールアドレスをご教授下されれば幸いです。

その他として、ラオスの物品のご紹介も検討しております。

会員の皆様には「IV-NEWS」等、ホームページ等でご案内させていただきます。

#### 4) 物品収集について

書き損じ葉書、テレホンカードの送付をお願いしておりましたが、新たにご家庭でご使用のプリンターの「使用済みインクジェットカートリッジ(純正に限る)」の収集を開始致しました。物品収集の送料については、引き続きご負担をお願いいたします。

### <サポート会員募集>

奨学金ドナー及び国際協力費・運営費ドナーを随時募集しています。一人でも多くの皆様のご協力を、宜しくお願い致します。

① 奨学金ドナー 年1口 12,000円以上

② 国際協力費又は運営費ドナー

※個人 年1口 3,000円以上

※団体及び法人 年1口 10,000円以上

・申込方法(銀行振込の場合は振込された方の氏名と会員番号の下4桁の明記をお願い致します)

郵便振替 : (口座番号) 00140-5-537168 (加入者名) カノック奨学金

銀行振込 : 埼玉りそな銀行浦和中央支店

(普通) 口座番号:5038052

名義人:(特非) 国際協力 NGO・IV-JAPAN

### 【特定非営利活動法人 国際協力NGO・IV-JAPAN】

#### 日本事務所

〒331-0058 埼玉県さいたま市西区飯田 426

TEL:048-622-8612 / FAX:048-625-0271

E-mail: [iv-japan@vanilla.ocn.ne.jp](mailto:iv-japan@vanilla.ocn.ne.jp)

#### ラオス事務所

P. O. BOX 7920 VIENTIANE, LAO P. D. R.

TEL/FAX: +856-21-26-1240

E-mail: [ivjapan@laopdr.com](mailto:ivjapan@laopdr.com)

<http://www6.ocn.ne.jp/~iv-japan/>